

日本政府の公墓支援決まる

ほうまさ
方正友好交流の会
事務局長 おおるい よしひろ 大類 善啓

1993年、私たちは「方正地区支援交流の会」を立ち上げ、10年余りに亘って、ささやかな経済援助活動の方正県に行ってきた。が、方正地区にいた「残留婦人」たちがほとんど日本に帰国した状況を受けて活動は収束していった。しかし、会を完全に解散するには忍び難い気持ちもあり、2005年6月、新たに「方正友好交流の会」を発足させた。

その時私たちは、活動の目標を、知られざる日本人公墓を多くの日本人、そして中国の人々に知ってもらうことが第一だと考えていた。当時、いたずらに高揚した両国の排他的なナショナリズムを乗り越えるには、国交が回復する9年前の1963年に建立された方正日本人公墓の存在を、日中両国の人々が知ることには大きな鍵がある、と思ったからである。

侵略された国とその国の人々が、侵略側の人々のお墓を建立するという世界史上にも稀有な事実を知ることによって、偏狭な民族主義ではなく、すべての人々が国境を越えて同じ思いを共有する、国際主義的な友愛精神、世界市民的な精神を呼び起こし、狭隘な「愛国主義」や敵対的な感情を少しでも氷解できればと考えたのだ。

そのために会報「^{せい}火^{ほう}方正」を発行し、機会あるごとに方正日本人公墓の存在を知ってもらうべく活動していた。幸いにも記録映画作家の羽田澄子さんにその思いが伝わり、プロデューサー：工藤充、演出：羽田澄子による映画『嗚呼 満蒙開拓団』の製作、完成につながった。

初めての文書による方正県政府からの支援要請

そんな折り、方正県政府から公墓がある「中日友好園林」の修繕費用について、日本の有識者に援助を呼びかけてほしいという文書がきた（「星火方正」8号 44頁参照）。私たちは会の発足当初から、公墓の維持管理を中国側に任せ、中国の好意に一方的に甘えているような日本の姿勢に疑問をもっていた。本来は日本政府が負担すべきだ、少なくとも日中の両国政府が共同で維持費用を負担すべきだと提言していた私たちは本腰を入れて、日本政府に支援要請をするべき時が来たと思った。そして改めて行動を開始し

たところ、急速に実りある成果を見た。ここに、会員及び支援していただいている皆さまに感謝の気持ちを込めて経緯をご報告したい。

本年6月9日、(社)日中友好協会会長で方正日本人公墓にも参拝されたことがある国会議員の加藤紘一氏に、当会参与の木村直美と共にお会いして私たちの趣意をお話した。加藤氏から、外務省の中国・モンゴル課長の^{たるみ}垂秀夫氏を紹介され、7月2日、垂・課長、町田穂高・課長補佐に、当会参与の奥村正雄とお会いした。そこで方正日本人公墓建立の経緯や現在の公墓状況などを説明し、公墓維持管理に関して、日本政府が支援すべき旨要請した。垂課長は、「真剣に検討します。他省庁との関係もあり、少し時間がかかるかもしれませんが、必ずご返事します」と、よくある官僚的な言辞ではなく、実に誠実な言葉をいただいた。

その後、8月28日から9月初旬にかけて中国東北部へ、「近現代の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅」の主催者側として出発する1週間前に、方正県政府の王偉新主任から、方正県設立100周年記念祝典の招聘状がきた。去年の夏、方正を訪れた時に、招聘状を送るのでぜひ出席してほしいと言われてはいたが、その後特に連絡はなかった。方正に行ってみてわかったことだが、ちょうど大類がこの時期に中国の東北に来ているので来ないかというのが実情のようであった。

「検証の旅」は、9月2日方正、3日ハルピン、そして帰国という日程だったが、ハルピンで団と別れ、9月5日の祝典に参加することにした。その帰途、松本盛雄瀋陽総領事、宮本雄二大使にお会いすべく連絡を取った。

「中国にいる日本人にぜひ羽田さんの映画を見せたい」

9月5日(土)の方正での祝典については別に、本誌の122頁に紹介したのでお読みいただきたい。さて、方正を離れて9月7日(月)瀋陽で松本盛雄総領事、加藤英次首席領事、佐伯岳彦副領事にお会いすることができた。日本政府の方正公墓支援について松本総領事は、「昨年<草の根無償援助>で方正県を支援したが、それと今回の公墓の維持・管理費用を出すこととはスキーム(枠組み)が違うので、現在どうするのか検討している」とのお話であった。

9月9日(水)には、北京で梅田邦夫首席公使にお会いすることができた。宮本雄二大使は、御手洗・経団連会長が北京で温家宝総理との会談に同席するというので残念ながらお会いできなかった。しかし、梅田邦夫首席公使からは、「方正友好交流

の会には、日本人公墓を多くの人たちに知らせていただき感謝している」と言われ感激した。また、「悲惨なめにあった開拓団の婦女子といえども中国から見れば侵略者だ。その人たちのお墓を造ってくれ、維持・管理をしてくれている方正県政府に、日本政府も国民を代表して感謝すべきだと思う」と語られた。

そして、「映画『嗚呼 満蒙開拓団』を中国にいる日本人、大使館職員、日本人学校、日本人会の人たちにもぜひ見せたい」と言われた。そこで帰国後、羽田澄子さんをお願いをして特別にDVD 1枚作ってもらい大使館に送った。

11月に入って梅田公使から「先週、宮本大使も含め約50名の館員に映画を見てもらいました。子供を殺さざるをない状況に追い込まれた方の気持ち、その後の人生を考えると胸が締め付けられる思いです。平和な時代に生きていることに改めて感謝せざるを得ません。有難うございました」というメールをいただいた。また、現在大使館に勤務し、映画のロケでは通訳として協力された^{きわた}り佐渡京子さんによれば、「日本に帰れない孤児の徐士蘭さん」が映画に出てきたが、「なんとか一時帰国させたい」という声や、10人ほどの職員の方々が、公墓参拝をしようという声もあがったようである。ともあれ梅田公使との会談はとても有意義なものだった。梅田さんとの会談には、厚生労働省から出向されている佐久間勝彦さんも孤児担当として同席された。

やっと実った日本政府の支援

中国から帰国後の10月1日、外務省の垂秀夫・課長、町田穂高・課長補佐に、奥村正雄とともにお会いした。垂課長は、「方正県政府と話し合い、毎年かかる日本人公墓の維持・管理費用、約51万円（日本円）の半分を、今年と来年に県政府に出す。再来年（2011年）からは、全額を財務省に予算要求し、半永久的に援助していきたい」という回答をいただいた。

感謝の気持ちを述べたところ、垂課長は「本当はもっと前に、この公墓の存在に気づき、維持管理に協力すべきでした」と言われた。

以上がこれまでの経緯である。私たちの、公墓の存在を多くの人たちに知らせる、そして、日本政府が公墓維持管理費用を負担すべきだ、という大きな二つの活動目標が実現しつつある今日、次なる目標は、日本の総理の公墓参拝の実現である。次頁の「鳩山総理、ぜひ公墓参拝を！」という拙文はその活動の一環だ。なおこの拙文は凌星光（社）日中科学技術文化センター理事長を通して仙谷由人（行政刷新改革担当大臣）氏に手渡し、江田五月（参議院議長）氏には私からメールで送ったものである。

鳩山総理、ぜひ日本人公墓に参拝を！

ほうまさ
一方正日本人公墓は、国際的な友愛精神の象徴である—

おおい よしひろ
大類 善啓

ほうまさ
(方正友好交流の会 事務局長)

民主党の圧勝、自民党惨敗をもたらした衆議院選挙の時、中国訪問中の私は、連日、中国・中央テレビ局の好意的な民主党政権登場のニュースに接しておりました。

日本の歴代総理が訪中する際、日中双方にとって縁のある場所を尋ねることが、いわば象徴的なこととして報道されてまいりました。鳩山総理が中国を訪問する際には、ぜひ、黒竜江省ハルピン市郊外の方正県に建立されている日本人公墓を参拝していただきたいと思えます。この公墓には、戦前の誤れる国策によって翻弄され、無念の涙をのんで亡くなった「残留婦人」や孤児たちの遺骨、約4500体が眠っております。

ある残留日本婦人の願いにこたえて、日中国交回復が実現する9年前の1963年、「祖国を見ることなく亡くなった開拓民たちも日本の軍国主義の犠牲者である」と、当時の中国政府は、懐の深い国際主義的な友愛精神で、侵略者の公墓を建立してくれました。

ぜひ、公墓を建立してくれた中国政府、中国人民に、心を込めた感謝のメッセージを送っていただきたい。そうすることによって、日中間の民間レベル、民衆レベルの融和と和解がより一層深まることは間違いないと思うからであります。また、中国の人々、とりわけ若い人々も、1950年代から1960年代半ばの、周恩来総理など中国政府指導部の国際主義的な友愛精神に満ちたヒューマニズムに感動することでしょう。

中国には、侵略した日本の罪業をしるす記念館や記念碑があちこちにあります。そこを訪問することもそれなりの意義があります。しかし、日本人公墓は、国境を超えた友愛精神を表現しており、そこを参拝することは、日中双方の国民に過去を反省し未来志向で進む精神を訴えるものであり、新政権の性格にふさわしい行為だと思えます。

私たちは2005年から、「方正友好交流の会」を設立し、怨念を超えて建立された日本人公墓の存在を、多くの日本人、そして中国人に知ってもらい、反中や嫌中感情、また反日感情を醸成するような排他的で狭隘なナショナリズムではなく、国際主義的な友愛精神が広まるよう会報『星火方正』を発行して参りました。

その『星火方正』によって、公墓の存在を知った旧満州・大連生まれの羽田澄子さんが、記録映画『嗚呼 満蒙開拓団』を昨秋完成させ、この6月13日から7月末まで、岩波ホールで連日3回上映され、延べ2万人の入場がありました。そして今現在、日本全国で上映され続けております。

2008年1月、北京に駐在する宮本雄二大使は公墓に参拝し、方正県政府に謝辞を述べられました。この宮本大使訪問まで、日本政府は40余年にわたってこの公墓の存在を、無視し続けてまいりました。今回の中国訪問中、私は北京で梅田邦夫・首席公使（宮本雄二大使は、御手洗経団連会長の温家宝首相との会談に同席するため、お会いできませんでした）にお会いしましたが、その際、梅田公使は、「中国にいる日本人だからこそ、日本人公墓の存在を知ってほしい。ぜひ北京の日本人会、日本人学校の人たちに、『嗚呼 満蒙開拓団』を見せたい」と言われました。

鳩山総理が公墓に参拝し、中国政府に感謝の言葉を述べれば、庶民レベルの双方の友愛感情は深まり、日中関係の更なる発展の土台作りにも貢献することでしょう。中国に唯一存在する日本人公墓の鳩山由紀夫総理の参拝を切に願うものであります。

(09年9月14日)